



# 明治前期の出版物における平仮名字体の使用傾向について

小林ベター, ダニエル

---

**(Citation)**

國文論叢, 48:25-42

**(Issue Date)**

2014-03

**(Resource Type)**

departmental bulletin paper

**(Version)**

Version of Record

**(JaLCD0I)**

<https://doi.org/10.24546/81011665>

**(URL)**

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81011665>



# 明治前期の出版物における平仮名字体の使用傾向について

ダニエル・小林ベター

## 一、はじめに

明治三十三年（一九〇〇）年八月二十一日の「小学校令施行規則」により、小学校で教える仮名字体が「一音一字体に定められ、小学校ではそれ以外の仮名字体、いわゆる変体仮名の教育が認められなくなった。同規則は、明治四十一年（一九〇七）年九月七日に廃止されるが、その間に社会全般における変体仮名の衰勢は決定的なものとなった。

さて、この「小学校令施行規則」は小学校教育を対象としているものだが、では、その公布以前の一般社会における仮名字体の使用傾向はどのようなものだったのだろうか。浜田啓介氏は近世の整版本を調査し、使用される仮名字体の数が収斂の傾向にあったと指摘している。<sup>1)</sup> 明治時代においても、特に活版本が盛んになってから仮名字体の数が減っていくことが認められており、「明治二十二年をばさむ前後数年は、変体仮名から近代仮名へ、活字字母の近代化がかなりの程度に<sup>2)</sup>ただし、印刷所単位の規模で進んだらしく」という指摘もある。<sup>2)</sup> しかし、具体的に明治時

代の間に字体数が年々どれほど減っていったのか、またどのような字体が使われていたのか、ということは未だに明らかになっていない。そこで、明治元（一八六八）年から明治三十三年頃までの出版物における仮名字体の使用傾向を確認したいと考える。また、明治前期になって初めて、主な印刷方法が整版から活版に移行するため、それぞれの印刷方法によって仮名字体の使用がどう変わるかについても確かめたいと思う。

## 二、調査方法

まず以下に、仮名字体の判断基準（二・一）、時代区分（二・二）、調査対象（二・三）、調査方法（二・四）の四点について説明する。

### 二・一 仮名字体の判断基準について

#### 二・一・一 先行研究と字体判断の問題

仮名字体の数を調べるには、まずどのような仮名を異なる字体と見なすか、どのような形の変異は同じ字体と見なすか、その判

断基準を定める必要がある。同じ音節を表すもので、違う字母に由来する仮名（例えば「安」に由来する〈あ〉と「阿」に由来する〈あ〉<sup>3</sup>）なら容易に区別できるが、同じ字母に由来しながらも、形を異にする仮名については、客観的に区別することが難しい場合がある。例えば、同じ字母の「多」に由来する仮名の形には〈さ〉・〈し〉・〈ふ〉・〈ふ〉・〈ふ〉などがある。上の前者二つと後者二つとの間にはかなり大きな形状の違いが認められるが、〈さ〉と〈し〉、〈ふ〉と〈ふ〉との間には、字体の差を認めるか、単なる筆の勢いなどによる字形の違いとみなすか断定しがたい。この、同じ字母に由来する字体の区別の判定には主観性が避けられないことは、先行研究にも指摘されている。例えば、浜田氏は「も」の字形をいくつか挙げて、それらを「どこで分かつか、或は分かすべきではないか」ということは、全くむづかしい問題である」と述べ、その処理の仕方を示しているが、字体に関わる問題について「総てが合理的に処理されたわけではなく、多く直感に頼らざるを得なかった」としている<sup>4</sup>。

二・一・二 本稿における字体判断基準

先に述べたことを踏まえ、本稿では、なるべく客観性を保てるように、明治時代の活字見本にある仮名字体に基づいて字体の判断基準を決めることにした。『聚珍録』の第三編に収録されている五つの活字見本にある字体を集めて、その中から異なる字体を

選んで判断基準とする。浜田啓介氏が指摘されている主観性または直感による処理は避けられないとしても、明治時代の活字見本を用いることで、当時の字体意識に基づいた判断基準を得ることが出来る。ただし、これもその字体意識を正確に反映しているとはまではいえないのであり、単に定量的な調査をするための枠組みではないのである。また、字体意識また字体の使用傾向は時代と共に変化するものであるため、近代より前の時代の仮名字体調査に本稿で設けた字体表を適用することも不適切である。

以下に資料とした活字見本の一覧を挙げる。

- ① 紙幣局活版部『活字見本』における二号平仮名明治十年（『聚珍録』における図番号四一三八。以下「図——」と示す）
- ② 大阪活版製造所『五号活字総数目録』明治十五年（図四一〇一一）
- ③ 印刷局活版部『活字紋様見本』における五号平仮名明治十八年（図四一三九）
- ④ 東京築地活版製造所『二号明朝活字書体見本』明治二十五年（図四一一四〇）
- ⑤ 東京築地活版製造所『五号明朝活字書体見本』明治二十七年（図四一一八）

各活字見本に現れる字体を比較し、全ての見本において区別されているものを別の字体として捉えた。また、全く同じ形ではなくても、右の活字見本において相補分布で現れ、字形が似ているものを区別しなかった。例えば、「ト」は②③④⑤の見本に現れているが、①では「ト」の形の活字が見える。「ト」と「ト」は



治十二年には草双紙はまだ整版印刷が主である。<sup>7)</sup>

④明治十七年から二十三年（一八八四～一八九〇） 活版主流期・前半

⑤明治二十四年から三十三年（一八九一～一九〇〇） 活版主流期・後半

佐々木亭が述べているように、一般的に整版と活版は明治十六年に印刷技法の主流の座を交替したとされている。よって、本調査では十七年から三十三年を活版主流期とし、二十四年を仮の区切りとして、前半と後半とに分けた。

## 二・三 調査対象

調査対象とその扱い方について、以下の凡例の通りとする。

・国立国会図書館の「近代デジタルライブラリー」に収録されている活版本と整版本を調査対象とした。出版年代が明治元年から三十三年のものまで扱った。平仮名表記を用いたノンフィクションの資料が少なかったため、基本的に文学作品を対象とした。但し、明治初年は平仮名を含む資料が少ないため、他の分野の出版物も調査対象とした。

・分野の分類は「近代デジタルライブラリー」に記載されている日本十進分類に拠ることとした。また、書誌情報は「近代デジタルライブラリー」に依った。

・巻号が複数ある資料は、それぞれの巻号の出版年が一年間以上離れている場合、別の資料として扱うことにした。

・明治五年までの出版年月を新暦に改めた。出版年月が不明な場合、資料の序の年月を取った。出版の月が不明な場合には

便宜のため一月とした。

・仮名字体の使い方が異なると考えられるため、整版本と活版本とを区別して扱うことにした。また整版資料の内、草双紙を区別して扱うことにした。ただし、活版本の草双紙は他の活版本と区別しなかった。

・活版本の内、本稿では明朝体活字で印刷された資料のみを対象とした。<sup>9)</sup>

・調査の煩瑣を避けるため、資料の振り仮名を調査対象から除外した。<sup>10)</sup>また挿絵に添えてある文字も対象外とした。

・序文においては仮名字体の使用のあり方が本文と著しく異なる場合が多いため対象から外した。また資料中の目次も対象外とした。序文や妙文を集めた本も対象外とした。他の分野より字体が多く使われているため、和歌に関わる資料を対象としなかった。

## 二・四 調査方法

調査方法について、以下の凡例の通りとする。

・原則として明治十六年以前の資料は全丁を調査し、「近代デジタルライブラリー」に複数の巻号が掲載されている場合、その第二巻までの全丁を対象とした。明治十七年以降に出版された資料は始めの巻号の六十頁（三十丁）分まで対象とする。これまで調査した十五年頃以降の出版物の多くにおいて、六十頁（三十丁）以降には新しい仮名字体がほとんど現れず、それ以上調べる価値が少ないと判断した為である。

・各資料中の本文において異なる字体数を数えた。頻出度に関

図1 整版本における平仮名の字体数

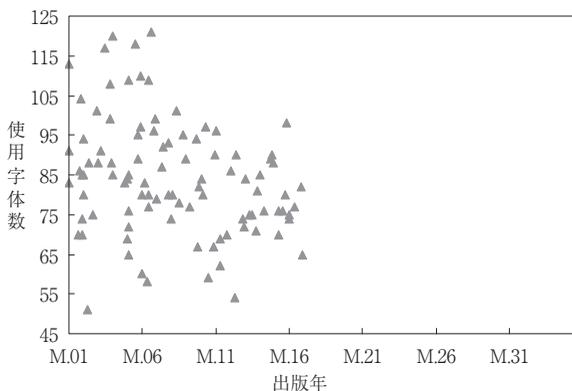


図2 活版本における平仮名の字体数

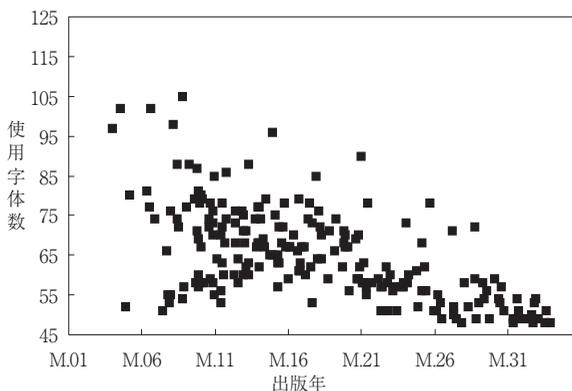
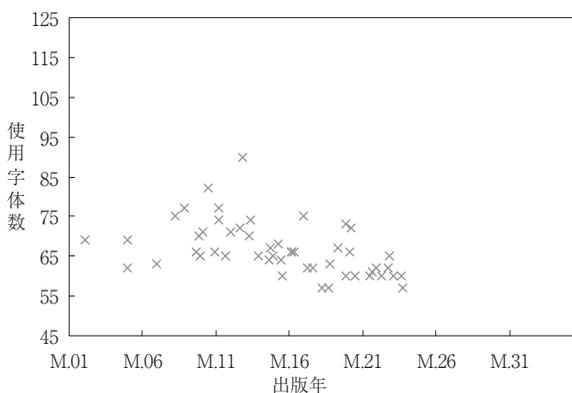


図3 草双紙における平仮名の字体数



係なく、異なる字体が一回でも現れた場合、仮名字体数に含めることにした。

- ・ 仮名の清濁を区別しなかった。
- ・ 一つの資料において、ある音節の仮名が一回も現れなかった場合、その資料の字体数に一を足した。その資料に現れないにしても、一音節に少なくとも一字体以上を使う意識があったと考えられるためである。

### 三、調査結果

ここでは、明治元年より三十三年までにおける傾向をまず確認する。その後、二・二で設けたそれぞれ五つの時期における傾向、また整版本と整版の草双紙、そして活版本にそれぞれどのような字体が使われているか詳しく確認する。





【表5】整版本①

分野	出版年月	書名	著者	出版者	出版地	字体数
【新聞】	M.01.10	『明治月刊』	開物新社(編)	岡田屋嘉七[他]	東京	86
	M.05.10	『内外各種新聞要録』	蕉雨堂主人(編)	万巻楼	東京	95
【歴史】	M.01.01	『児島誌』	石阪堅社	大坂屋源介	倉敷	113
	M.03.01	『英国史略』	河津孫四郎(訳)	知新館	東京	88
	M.03.03	『史学童観抄』	市川清流	従吾所好齋	東京	91
	M.03.11	『皇朝歴代沿革図解』	大槻東陽(編)	錢屋惣四郎	東京	108
	M.04.01	『古史通』	新井白石	松山堂	東京	120
	M.04.11	『竹島雜誌』	松浦武四郎	雁金屋清吉	東京	83
	M.05.01	『史略』	文部省(編)	文部省	東京	84
	M.05.02	『神字古事記』初編	藤原政興(撰述)	松本屋亀吉	東京	109
	M.02.05	『開知新編』	橋爪貫一(纂)	椀屋喜兵衛	東京	88
	M.02.09	『世界図説』	福沢諭吉(編訳)	慶応義塾	東京	75
【政治】	M.04.01	『西洋夜話』	寧静学人	紀伊国屋源兵衛	不明	85
	M.01.12	『外国事務』	福地松痴(訳)	松莊館	堺	74
【法律】	M.01.12	『京都府布令書』	京都府	京都府	京都	85
	M.01.01	『和蘭政典』	神田孝平(訳)	不明	不明	83
【経済】	M.03.06	『地方調法記』	烏有逸人	青松軒	東京	117
	M.02.01	『租調考』	三浦千春	永楽屋正兵衛	名古屋	80
	M.06.05	『印紙税略説』	星亨・有島武(編訳)	大蔵省	[東京]	58
	M.06.06	『銀行規略』	加藤祐一(編)	積玉團	大阪	109
【教科書類】	M.05.12	『珍奇物語』	東江楼主人(編)	東江楼	東京	97
	M.06.01	『開智童子通』	内川勇(編)	文溪堂	東京	80
【風俗習慣】	M.02.01	『西俗一覽』	黒沢孫四郎(訳)	其奥社	不明	94
	M.03.11	『上代衣服考』	豊田長敦	豊田長敦	不明	99
【軍事】	M.01.09	『軍事小典』	兵學校(訳)	兵學校	不明	70
	M.02.04	『法朗西撒兵教練』	山本常五郎(訳)	山本常五郎	佐倉町(千葉県)	51
【数学】	M.02.01	『通客必用算法珍書』	洒落斎唐人	中外堂	東京	85
	M.05.01	『西洋算法比例法』	岸俊雄(編)	花街堂	東京	69
	M.01.12	『天地異変』	小幡篤次郎(訳)	慶応義塾	東京	70
【自然科学】	M.05.12	『画本窮理物語』	岡田伴治(編訳)	博文堂	東京	110
	M.06.01	『改曆弁』	福沢諭吉	慶応義塾	東京	60
	M.06.06	『窮理新説』	矢須河通治(訳)	松村九兵衛	大阪	80
【医学】	M.01.01	『外療一斑』	加藤誠(抄訳)	雁金屋清吉	東京	91
	M.06.11	『長生法』	石黒忠恵	有喜書屋	東京	96
【農業】	M.03.12	『雀糞論説』	三毛証	偶然舎	不明	88
	M.05.10	『牛乳考・屠畜考』	近藤芳樹	日新堂	東京	89
	M.06.08	『製茶新説』	増田充綱(編)	三省書屋	東京	121
【文学】	M.01.11	『南山踏雲録』	伴林光平	村上勘兵衛	京都	104
	M.02.12	『浮世形六枚屏風』	柳亭種彦	鷹金屋清吉等	東京	101
	M.05.02	『胡瓜遣』初編上の巻第一筆	仮名垣魯文	須原屋茂兵衛	東京	85
	M.05.02	『胡瓜遣』初編上の巻第二筆	仮名垣魯文	須原屋茂兵衛	東京	65
	M.05.02	『胡瓜遣』初編下の巻第一筆	仮名垣魯文	須原屋茂兵衛	東京	72
	M.05.02	『胡瓜遣』初編下の巻第二筆	仮名垣魯文	須原屋茂兵衛	東京	76
	M.05.07	『東京奇談』	架空楼主人	中外堂	東京	118
	M.06.03	『新制兎美断語』	万亭応賀	山崎屋清七	東京	83
M.06.12	『復古夢物語』	松村春輔(編)	大嶋屋伝右衛門	東京	99	

【表6】活版本①

分野	出版年月	書名	著者	出版者	出版地	字体数
【歴史】	M.04.01	『李弘交兵記』	伊藤弥次郎(訳)	横浜活版社	横浜	97
	M.04.07	『法普戦争誌略』	渡六之助	須原屋茂兵衛	東京	102
	M.06.08	『日本誌略』	山田養吉	海軍兵学寮	東京	102
【法律】	M.06.07	『いろは引御規則早見』	嶋次三郎(編)	好文堂	東京	77
【教育】	M.06.05	『小学教師心得』	文部省	師範学校	[東京]	81
【自然科学】	M.05.03	『新塾余談』	本木咲三	新塾活字製造所	[長崎]	80
【文学】	M.04.12	『ちえのいとぐち』	古川正雄	青山堂	東京	52
	M.06.12	『造花誌』	室賀正祥(編)	不明	不明	74

【表7】草双紙①

出版年月	書名	著者	出版者	出版地	字体数
M.02.02	『鬼界島荒磯千鳥』	楽亭西馬	延寿堂	東京	69
M.05.01	『今朝春三組杯』	三遊亭月朝	青盛堂	東京	69
M.05.01	『倭国字西洋文庫』	仮名垣魯文	紅木堂	東京	62



分野	出版年月	書名	著者	出版者	出版地	字数
【倫理】	M.08.01	『勸懲雑話』	和田順吉(訳)	文部省	東京	76
	M.08.12	『齊家必携』	入江陳重(訳)	入江陳重	東京	57
	M.09.11	『昭勅集覽』	太田事郎(編)	柳影軒	京都	57
	M.10.01	『修身教訓』	宮崎駿児(訳)	文部省	東京	78
	M.10.04	『西洋談草』	岩見鑑造(抄訳)	日就社	東京	58
	M.10.11	『修身談』	長谷川次潔・安達伝昌(編)	開文舎	丸亀	76
【神道】	M.10.08	『小学修身談』	天野皎(編)	池上儀八	大阪	72
	M.11.08	『明治美譚』	山住才三(編)	積玉圃	大阪	60
	M.10.03	『教会撮要』	千家尊福	千家尊福	杵築村(島根県)	79
	M.11.06	『生死弁解』	橘語清	橘多久見	井門村(愛媛県)	70
	M.11.07	『厳島宮路の枝折』	村田良徳(編)	村田良徳	広島	63
	M.09.11	『西国征討戦記』	吉川政興(編)	吉川政興	東京	69
【歴史】	M.09.11	『西国戦争日誌』	前田健次郎(編)	柳谷藤吉	東京	60
	M.10.02	『鹿兒島征討全記』	井沢菊太郎(編)	井沢菊太郎	東京	67
	M.10.02	『鹿兒島暴徒風説録』	篠田久治郎(編)	共楽社	東京	80
	M.10.09	『遭難記実』	伊藤卓三(編)	日報社	東京	59
	M.10.11	『西郷隆盛蓋棺記』	前田喜二郎(編)	前田喜二郎	大阪	73
	M.11.03	『露土戦記』	富山柴人(抄訳)	塩田庸人	大阪	64
【紀行・地理】	M.08.06	『邏羅紀行』	工部省	工部省	[東京]	74
	M.08.10	『諸国郡郷考』	富永春都	明珠堂	神戸(新潟県)	105
	M.09.04	『鶏林事略』	瀬壽寿人・林深造(編)	吉田清兵衛	東京	88
	M.08.10	『政体心得草』	中金正衡(編)	目耕書肆	東京	54
	M.07.09	『締盟各国条約類纂』	外務省(編)	東京日就社	東京	66
	M.08.07	『律例精義』	鈴木唯一(訳)	瑞穂屋卯三郎	東京	72
【政治】	M.08.01	『西洋風俗兒女心得草』	天野御民(述)	風洋堂	不明	55
	M.08.03	『男礼』	高銀一・高良二(訳)	壺籠学社	不明	98
	M.09.02	『開化年中行事』	松井惟利	松井惟利	東京	77
	M.09.09	『行軍測絵』	陸軍文庫	陸軍文庫	[東京]	58
	M.09.12	『通俗徴兵弁』	緒方惟精(編)	緒方惟精	佐伯村(大分県)	81
	M.09.10	『小供の読むべき理学の問答』	木村宗三(訳)	函館屋大蔵	東京	87
【数学】	M.09.08	『数学教授書解』	藤井信暁(述)	文化堂	京都	79
	M.10.09	『これら病予防心得』	山田栄造(編)	江島伊兵衛	東京	78
	M.11.09	『養生談』	斎隆哉(編)	熊本県	熊本県	68
	M.11.01	『西洋裁縫教授書』	原田新次郎(訳)	川勝利八	東京	55
	M.09.10	『育兒小言』	沢田俊三(訳)	気海楼	東京	71
	M.10.02	『子育の草紙』	望月誠(編)	由己社	東京	58
【産業・農業】	M.10.08	『育嬰草』	高島祐啓	誠求堂	東京	74
	M.11.06	『通俗男女自衛論』	三宅虎太(訳)	三宅虎太	東京	56
	M.11.06	『小児のわるくせ』	片山平三郎(抄訳)	片山平三郎	東京	53
	M.07.06	『西説実験養蚕理解』	原田道義(訳)	青藜閣	東京	51
	M.07.11	『有用木材捷覧』	博物館	博物館	[東京]	55
	M.07.12	『勸業報告』	内務省勸業寮	勸業寮	[東京]	53
【文学】	M.08.06	『教門雑誌』	大内青巒	知報社	東京	88
	M.10.11	『勸農新書』	林遠里	林遠里	重留村(福岡県)	70
	M.10.12	『落語講談新聞図解』	永島福太郎(編)	永島福太郎	東京	58
	M.11.01	『磊磊珍報』	雑賀福之助(編)	雑賀福之助	大阪	85
	M.11.07	『鉄道ばなし』	高島藍泉(編)	文栄閣	東京	72
	M.11.07	『迂叟兵衛賽胡蝶記』	邨川弘三(編)	小野藤吉	大阪	78
M.11.10	『昔昔珍話』	内藤廉吉	熊谷庄七	東京	74	
M.11.10	『花廻家苞』	半井忠見	平野栄	東京	86	

【表10】活版本②

活版本の使用字体数は【表10】のようになっている。この期間の平均字体数が六九・九、標準偏差が二・五となっている。例外的な『男礼』と『諸国郡郷考』を除けば、平均は六八・六となる。明治六年までの活版本の平均より一九字体低く、同時期の整

この時期の資料には既に字体数が六十前後となっている資料が多い。特に明治九年以前の資料は、字体数が七十以上のものと六十以下のものと、二つのグループに大別できるが、その二つの間、六十一以上七十未満の資料がかなり少ない。使われている字体は【表11】の通りである。

【表11】活版本②

ン	ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア
ん	わ ら と ／ わ	ら と ／ ら	や ／ や	ま ま ／ ま	は は ／ は	な な ／ な	た た ／ た	さ さ ／ さ	か か ／ か	あ あ ／ あ
	キ	リ		ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ
	る	り ／ り		み み ／ み	ひ ひ ／ ひ	に に ／ に	ち ち ／ ち	し し ／ し	き き ／ き	い い ／ い
		ル	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ
		る ／ る	ゆ ゆ ／ ゆ	む む ／ む	ふ ふ ／ ふ	ぬ ぬ ／ ぬ	つ つ ／ つ	す す ／ す	く く ／ く	う う ／ う
	エ	レ		メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ
	え ／ え	れ え ／ れ		め め ／ め	へ へ ／ へ	ね ね ／ ね	て て ／ て	せ せ ／ せ	け け ／ け	え え ／ え
	ヲ	ロ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ
	を と ／ を	ろ ろ ／ ろ	よ よ ／ よ	も も ／ も	ほ ほ ／ ほ	の の ／ の	と と ／ と	そ そ ／ そ	こ こ ／ こ	お お ／ お

この時期の草双紙における字体数は【表12】の通りになっている。平均値が七〇・九となっており、字体数の減少傾向に停滞が見られる。同時期の活版本の平均値にかなり近いが、使用されている字体は異なっている。使われている仮名字体は【表13】の通りである。

【表12】草双紙②

ン	ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア
ん	わ ら と ／ わ	ら と ／ ら	や ／ や	ま ま ／ ま	は は ／ は	な な ／ な	た た ／ た	さ さ ／ さ	か か ／ か	あ あ ／ あ
	キ	リ		ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ
	る	り ／ り		み み ／ み	ひ ひ ／ ひ	に に ／ に	ち ち ／ ち	し し ／ し	き き ／ き	い い ／ い
		ル	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ
		る ／ る	ゆ ゆ ／ ゆ	む む ／ む	ふ ふ ／ ふ	ぬ ぬ ／ ぬ	つ つ ／ つ	す す ／ す	く く ／ く	う う ／ う
	エ	レ		メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ
	え ／ え	れ え ／ れ		め め ／ め	へ へ ／ へ	ね ね ／ ね	て て ／ て	せ せ ／ せ	け け ／ け	え え ／ え
	ヲ	ロ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ
	を と ／ を	ろ ろ ／ ろ	よ よ ／ よ	も も ／ も	ほ ほ ／ ほ	の の ／ の	と と ／ と	そ そ ／ そ	こ こ ／ こ	お お ／ お

【表13】草双紙②

出版年月	書名	著者	出版者	出版地	字体数
M.07.01	『厚化粧万年島田』	為永春水(2世)	蔦屋吉藏	東京	63
M.08.04	『報国やまと魂』	染崎延房(編)	延寿堂	東京	75
M.08.11	『天下茶屋真伝記』	橋本兼次郎	小林鉄治郎	東京	77
M.09.09	『千成瓢箪』	篠田仙果(編)	沢村屋清吉	東京	66
M.09.11	『天草島優名之会合』	篠田仙果(編)	山本平吉	東京	70
M.09.12	『桜田実記』	笑門舎福来	大橋堂	東京	65
M.10.02	『探誠夢復路』	竹内栄久・沼尻桂一郎(編)	沢久次郎	東京	71
M.10.07	『絵本明十戦記』	湯川範次郎(編)	湯川範次郎	大坂	82
M.10.12	『滑稽〇〇陳腐』	岩崎好正	若林喜兵衛	東京	66
M.11.03	『鳥追阿松海上新話』	久保田彦作(編)	大倉孫兵衛	東京	74
M.11.03	『西南雲晴朝東風』	篠田仙果	山松堂	東京	77
M.11.09	『近世会津軍記』	小林鉄次郎(編)	小林鉄次郎	東京	65



分野	出版年月	書名	著者	出版者	出版地	字体数
【仏教】	M.16.03	『安心ほこりたたき』	慧鶴(述)	山本貫通	東京	67
【社会】	M.13.03	『浮世の迷惑』	前田時三	前川文栄閣	大阪	71
【風俗習慣】	M.16.06	『一新語礼式』	栗野忠雄(編)	巖波書店	東京	70
【医学】	M.12.12	『医者之来るまで』	味岡弥輔(編)	誠之堂	東京	71
	M.12.12	『医者之七投』	寺内磯熊(編)	温知社	東京	60
【家庭科学】	M.16.01	『育児の種』	矢守貫一(編)	矢守貫一	東京	59
【文学】	M.12.06	『神戸叢譚』	藤堂栄作(編)	藤堂栄作	神戸	68
	M.12.06	『西郷地獄征討記』	栗野忠雄(編)	金田儀兵衛	東京	73
	M.12.08	『佐寅風燧炬仇敵』	坂部秋水	江川良純	東京	58
	M.12.08	『おさんの穴』	望月誠	思誠堂	東京	64
	M.12.11	『お絹類平野路の螢火』	菱田忠三郎(編)	菱田忠三郎	京都	76
	M.12.12	『大坂二度驚愕』	沙越新八(編)	沙越新八	大阪	75
	M.13.01	『大盗人の咄し』	渡辺慎一郎(編)	石川都賀堂	大阪	68
	M.13.03	『鼠小僧実伝記』	久保内旨就(編)	うさぎや誠	東京	62
	M.13.05	『春風情話』	橋頭三(訳述)	中島精一	東京	63
	M.13.05	『世界喫驚新話』	岩崎好正	巖々堂	東京	88
	M.13.05	『春霞黄金の双蝶』	若松永胤	岡田平次郎	東京	60
	M.13.10	『世の中岡目八目』	芳南散史	供泉堂	東京	74
	M.13.11	『浅草橋も見にくく藤の娘ころ』	拈華道人	風韻舎	東京	67
	M.13.12	『婀娜桜夜の嵐』	不明	木崎有助	甲府	68
	M.13.12	『江戸紫徳川源氏』	吉田慶(編)	静雲堂	大阪	77
	M.14.01	『兼好法師物見車』	近松門左衛門	雨香山景雄	東京	68
	M.14.01	『世間へ極内証』	高濱常業(編)	鶴の屋	東京	62
	M.14.01	『戯作新説話』	福岡広業(編)	聚文社	大阪	77
	M.14.05	『転猫座敷の噂』	松村春輔	松村春輔	東京	69
	M.14.06	『野沢の流雲間の月影』	歌川国鶴	松寿園	横浜	67
	M.14.07	『近世米国奇談』	小川吉之輔(編)	柳影社	高知	79
	M.14.10	『愛地奇論』	松井鉤夫	松寿堂	東京	65
	M.14.12	『近世北海奇聞』	菊田廉三郎(編)	菊田廉三郎	札幌	96
	M.14.12	『喜八郎父子道中双六』	田中耕馬(編)	呑楽舎	神戸	65
	M.15.02	『地獄極楽一周記』	大久保夢遊	漸進堂	東京	75
	M.15.05	『佐倉義民伝』	不明	栄泉社	東京	63
	M.15.05	『烈女の疑獄』	袖田兼太郎(抄訳)	由己社	東京	57
	M.15.05	『東洋自由の魁』	野田与三郎(編)	開成社	東京	65
	M.15.06	『白繻譚実記』	城慶度	青木活版所	東京	63
	M.15.06	『西洋奇談富貴の種時』	江川勝信(編訳)	續文舎	東京	72
	M.15.08	『夢想兵衛胡蝶物語』	滝沢馬琴	栄久社	東京	68
	M.15.09	『手当芳題護主奴記』	森仙吉(編)	森仙吉	東京	72
	M.15.11	『いろは文庫正史実伝』	為永春水	藤森善七	甲府	67
	M.16.02	『今姐妃於百の伝』	吉田正太郎(編)	秩山堂	東京	67
	M.16.09	『雨夜語宇都谷峠』	柳条亭花彦	武蔵屋	東京	66
	M.16.10	『桜田血染の雪』	菊亭静	太平堂	東京	79
	M.16.11	『鴉鷲合戦物語』	不明	古書保存書屋	東京	61
	M.16.11	『江戸新誌』	手塚盛寿(編)	手塚盛寿	東京	63
【翻訳文学】	M.12.05	『三笑人』	山田保(抄訳)	山田保	東京	60
	M.12.06	『童蒙諭言東西奇談』	坂部広光(訳述)	諏訪頼敏	東京	76
	M.14.02	『英草紙』	中尾氏就(訳)	丸屋善七	東京	74
	M.15.10	『自由之凱歌』	宮崎夢柳(訳)	絵入自由新聞社	東京	78
	M.16.10	『人肉買入裁判』	井上勤(訳)	今古堂	東京	61
	M.16.12	『第二十世紀未来誌』	龍田謙郎・香藤聯(訳)	稲田佐兵衛	東京	67

【表17】活版本③

「整版草双紙における字体数は【表18】の通りである。平均値は六八・五で、標準偏差は六・九である。例外となっている『不事多俠客伝』を除けば、平均が六七となる。前の時期より三・九字体下がつているが、やはり同時期の活版本に近い字体数となっている。使われている字体は【表19】の通りである。」

出版年月	書名	著者	出版者	出版地	字体数
M.12.01	『したきりすずめ』	坂田善吉(編)	坂田善吉	東京	71
M.12.09	『復讐白石咄』	守川音次郎(編)	青盛堂	東京	72
M.12.11	『不事多俠客伝』	羽田富次郎(編)	大橋堂	東京	90
M.13.04	『天下茶屋仇討』	泉竜亭是正	荒川藤兵衛	東京	70
M.13.05	『金花胡蝶幻』	京文舎文吉(編)	青盛堂	東京	74
M.13.12	『川中島大合戦』	児玉又七(編)	大橋堂	東京	65
M.14.09	『慶安太平正雪一代記』	辻岡文助(編)	辻岡文助	東京	64
M.14.10	『石川五右衛門真砂出立』	宮田孝助(編)	宮田孝助	東京	67
M.14.12	『慶安太平記』	綱島亀吉(編)	島鮮堂	東京	65
M.15.04	『森三勇士伝』	周春(画)	沢村屋清吉	東京	68
M.15.06	『於七吉三浮名の絵合』	荒川吉五郎(編)	荒川吉五郎	東京	64
M.15.08	『朝鮮変動記』	宮田伊助(編)	宮田伊助	東京	60
M.16.03	『金竜山浅草寺聖観世音略縁起』	竹内栄久(編)	関根孝助	東京	66
M.16.03	『室町源氏胡蝶のまき』	笠亭仙果	紅英堂	東京	66
M.16.05	『皿屋敷於菊之実伝』	羽田富治郎(編)	羽田富治郎	東京	66

【表18】草双紙③

【表19】草双紙③

ア	あ	あ	い	い	い	う	え	え	お
カ	か	か	キ	キ	ク	ク	ケ	ケ	コ
サ	さ	さ	シ	シ	ス	ス	セ	セ	ソ
タ	た	た	チ	チ	ツ	ツ	テ	テ	ト
ナ	な	な	ニ	ニ	ヌ	ヌ	ネ	ネ	ノ
ハ	は	は	ヒ	ヒ	フ	フ	ヘ	ヘ	ホ
マ	ま	ま	ミ	ミ	ム	ム	メ	メ	モ
ヤ	や	や	ヨ	ヨ	ユ	ユ	ヨ	ヨ	ヨ
ラ	ら	ら	リ	リ	ル	ル	レ	レ	ロ
ワ	わ	わ	ワ	ワ	エ	エ	エ	エ	オ
ン	ん	ん	ン	ン	エ	エ	エ	エ	オ

三・一・四 活版主流期・前半（明治十七年から二十三年まで）

この時期には、既に整版本は少なく、調査しなかった。活版本の資料における字体数は【表23】の通りである。平均値は六三・八で、標準偏差は八・六となっている。例外の『日新館叢書』『童子訓』と『国民の涙』を除けば、六二・八である。前の時期より五・六字体減っている。

この時期において活版本の字体が急速に整理されていくことになるが、字体の減少は一定のペースで進んだわけではなく、明治二十年と二十二年との間に字体数が大幅に下がることが確認された。この時期における各年の平均値は【表20】の通りである。

明治十九年までは、前の時期の平均値（六七）から字体数が大きな変化はないが、二十年から二十二年の三年間で平均値がほぼ十二字体減っていることがわかる。次の時期で見られるように二十二年以降も、これほどの急な変化は見えない。この傾向は、三好行

【表20】

平均字体数	66.7
M.17	68.0
M.18	68.3
M.19	63.1
M.20	61.0
M.21	55.4
M.22	56.6
M.23	

雄（一九七七）の記述とおおよそ符合している。字体収斂傾向を詳しく確認するために、やはり二十二年前後の資料を重点的に確認する必要がある。

二十一年三月出版の『愛児の旅』には二十五頁以降、使用されている活字が一新している。ページ数の量の違いが影響している可能性があるが、二十五頁以降の方が使用字体数が多い。使われている字体は【表21】の通りである。

【表21】活版本④

ア	あ	あ	い	い	い	う	え	え	お
カ	か	か	キ	キ	ク	ク	ケ	ケ	コ
サ	さ	さ	シ	シ	ス	ス	セ	セ	ソ
タ	た	た	チ	チ	ツ	ツ	テ	テ	ト
ナ	な	な	ニ	ニ	ヌ	ヌ	ネ	ネ	ノ
ハ	は	は	ヒ	ヒ	フ	フ	ヘ	ヘ	ホ
マ	ま	ま	ミ	ミ	ム	ム	メ	メ	モ
ヤ	や	や	ヨ	ヨ	ユ	ユ	ヨ	ヨ	ヨ
ラ	ら	ら	リ	リ	ル	ル	レ	レ	ロ
ワ	わ	わ	ワ	ワ	エ	エ	エ	エ	オ
ン	ん	ん	ン	ン	エ	エ	エ	エ	オ



【表24】草双紙④

出版年月	書名	著者	出版者	出版地	字体数
M.17.01	『鬼薊清吉兇悪伝月鑑』	大西庄之助(編)	大西庄之助	東京	75
M.17.04	『絵入天草軍記』	井上茂兵衛(編)	井上茂兵衛	東京	62
M.17.08	『天草戦争記』	武田平治(編)	金寿堂	東京	62
M.18.04	『八大伝』	牧金之助(編)	深川屋豊	東京	57
M.18.09	『石山軍記』	尾関とよ(編)	牧金之助	東京	57
M.18.10	『為朝一代記』	下田惣太郎(編)	隆湊堂	東京	63
M.19.05	『実録二代鏡天満仇討』	山口亀吉(編)	山口亀吉	東京	67
M.19.11	『飛脚天狗金持自慢』	笠亭仙果	鍋野長三郎	名古屋	73
M.19.11	『俠客伝』	奥山重次(編)	宝山堂	東京	60
M.20.03	『伊賀の仇討』	小川安造(編)	小川安造	東京	66
M.20.04	『四国大合戦』	上原参治郎(編)	上原参治郎	東京	72
M.20.07	『鏡山故郷錦』	沢久次郎(編)	沢久次郎	東京	60
M.21.07	『敵討伊賀水月』	不明	千松堂	東京	60
M.21.09	『伊賀越仇討』	森本順三郎	森本順三郎	東京	61
M.21.12	『田宮仇うち』	小林新吉	小林新吉	東京	62
M.22.05	『慶安太平記』	赤松市太郎(編)	駸々堂	大坂	60
M.22.10	『三国記』	前田武之助(編)	牧金之助	東京	62
M.22.11	『西遊記倭錦』	尾関トヨ(編)	豊栄堂	東京	65
M.23.02	『実録川中島軍記』	不明	井上市松	大坂	60
M.23.09	『京鹿子娘道成寺』	不明	長谷川園吉	東京	60
M.23.10	『実録義経勲功記』	鎌田在明(編)	鎌田在明	東京	57

三・一・五 活版主流期・後半(明治二十四年から三十三年まで)  
 整版本と草双紙が少なく、この時期は活版本のみを調査した。  
 その使用字体数は【表26】の通りである。この時期の平均値は五  
 四・七で、標準偏差は七・一である。例外は「心の楽」、「艶」、  
 『宇都宮騒動記』、『海賊船』の五点であるが、これらを除けば、

平均字体数は五三・一になる。二十二年と二十三年の二年間の平均字体数(五六・五)より二・六下がつており、前の時期ほどの大幅な変化はない。二十七年の『いわひ歌』など、ちょうど四十八字体が用いられる資料が現れ始める。使われている字体は【表25】の通りである。ほぼ現行の字体に収斂していることが確認できる。

【表25】活版本⑤

ア	あ	あ	あ	ア	あ	ア	あ
カ	か	か	カ	か	カ	か	カ
キ	き	き	キ	き	キ	き	キ
ク	く	く	ク	く	ク	く	ク
ケ	け	け	ケ	け	ケ	け	ケ
コ	こ	こ	コ	こ	コ	こ	コ
ク	く	く	ク	く	ク	く	ク
カ	か	か	カ	か	カ	か	カ
キ	き	き	キ	き	キ	き	キ
ク	く	く	ク	く	ク	く	ク
ケ	け	け	ケ	け	ケ	け	ケ
コ	こ	こ	コ	こ	コ	こ	コ
ク	く	く	ク	く	ク	く	ク
カ	か	か	カ	か	カ	か	カ
キ	き	き	キ	き	キ	き	キ
ク	く	く	ク	く	ク	く	ク
ケ	け	け	ケ	け	ケ	け	ケ
コ	こ	こ	コ	こ	コ	こ	コ
ク	く	く	ク	く	ク	く	ク
カ	か	か	カ	か	カ	か	カ
キ	き	き	キ	き	キ	き	キ
ク	く	く	ク	く	ク	く	ク
ケ	け	け	ケ	け	ケ	け	ケ
コ	こ	こ	コ	こ	コ	こ	コ
ク	く	く	ク	く	ク	く	ク
カ	か	か	カ	か	カ	か	カ
キ	き	き	キ	き	キ	き	キ
ク	く	く	ク	く	ク	く	ク
ケ	け	け	ケ	け	ケ	け	ケ
コ	こ	こ	コ	こ	コ	こ	コ
ク	く	く	ク	く	ク	く	ク
カ	か	か	カ	か	カ	か	カ
キ	き	き	キ	き	キ	き	キ
ク	く	く	ク	く	ク	く	ク
ケ	け	け	ケ	け	ケ	け	ケ
コ	こ	こ	コ	こ	コ	こ	コ
ク	く	く	ク	く	ク	く	ク
カ	か	か	カ	か	カ	か	カ
キ	き	き	キ	き	キ	き	キ
ク	く	く	ク	く	ク	く	ク
ケ	け	け	ケ	け	ケ	け	ケ
コ	こ	こ	コ	こ	コ	こ	コ
ク	く	く	ク	く	ク	く	ク
カ	か	か	カ	か	カ	か	カ
キ	き	き	キ	き	キ	き	キ
ク	く	く	ク	く	ク	く	ク
ケ	け	け	ケ	け	ケ	け	ケ
コ	こ	こ	コ	こ	コ	こ	コ
ク	く	く	ク	く	ク	く	ク
カ	か	か	カ	か	カ	か	カ
キ	き	き	キ	き	キ	き	キ
ク	く	く	ク	く	ク	く	ク
ケ	け	け	ケ	け	ケ	け	ケ
コ	こ	こ	コ	こ	コ	こ	コ
ク	く	く	ク	く	ク	く	ク
カ	か	か	カ	か	カ	か	カ
キ	き	き	キ	き	キ	き	キ
ク	く	く	ク	く	ク	く	ク
ケ	け	け	ケ	け	ケ	け	ケ
コ	こ	こ	コ	こ	コ	こ	コ
ク	く	く	ク	く	ク	く	ク
カ	か	か	カ	か	カ	か	カ
キ	き	き	キ	き	キ	き	キ
ク	く	く	ク	く	ク	く	ク
ケ	け	け	ケ	け	ケ	け	ケ
コ	こ	こ	コ	こ	コ	こ	コ
ク	く	く	ク	く	ク	く	ク
カ	か	か	カ	か	カ	か	カ
キ	き	き	キ	き	キ	き	キ
ク	く	く	ク	く	ク	く	ク
ケ	け	け	ケ	け	ケ	け	ケ
コ	こ	こ	コ	こ	コ	こ	コ
ク	く	く	ク	く	ク	く	ク
カ	か	か	カ	か	カ	か	カ
キ	き	き	キ	き	キ	き	キ
ク	く	く	ク	く	ク	く	ク
ケ	け	け	ケ	け	ケ	け	ケ
コ	こ	こ	コ	こ	コ	こ	コ
ク	く	く	ク	く	ク	く	ク
カ	か	か	カ	か	カ	か	カ
キ	き	き	キ	き	キ	き	キ
ク	く	く	ク	く	ク	く	ク
ケ	け	け	ケ	け	ケ	け	ケ
コ	こ	こ	コ	こ	コ	こ	コ
ク	く	く	ク	く	ク	く	ク
カ	か	か	カ	か	カ	か	カ
キ	き	き	キ	き	キ	き	キ
ク	く	く	ク	く	ク	く	ク
ケ	け	け	ケ	け	ケ	け	ケ
コ	こ	こ	コ	こ	コ	こ	コ
ク	く	く	ク	く	ク	く	ク
カ	か	か	カ	か	カ	か	カ
キ	き	き	キ	き	キ	き	キ
ク	く	く	ク	く	ク	く	ク
ケ	け	け	ケ	け	ケ	け	ケ
コ	こ	こ	コ	こ	コ	こ	コ
ク	く	く	ク	く	ク	く	ク
カ	か	か	カ	か	カ	か	カ
キ	き	き	キ	き	キ	き	キ
ク	く	く	ク	く	ク	く	ク
ケ	け	け	ケ	け	ケ	け	ケ
コ	こ	こ	コ	こ	コ	こ	コ
ク	く	く	ク	く	ク	く	ク
カ	か	か	カ	か	カ	か	カ
キ	き	き	キ	き	キ	き	キ
ク	く	く	ク	く	ク	く	ク
ケ	け	け	ケ	け	ケ	け	ケ
コ	こ	こ	コ	こ	コ	こ	コ
ク	く	く	ク	く	ク	く	ク
カ	か	か	カ	か	カ	か	カ
キ	き	き	キ	き	キ	き	キ
ク	く	く	ク	く	ク	く	ク
ケ	け	け	ケ	け	ケ	け	ケ
コ	こ	こ	コ	こ	コ	こ	コ
ク	く	く	ク	く	ク	く	ク
カ	か	か	カ	か	カ	か	カ
キ	き	き	キ	き	キ	き	キ
ク	く	く	ク	く	ク	く	ク
ケ	け	け	ケ	け	ケ	け	ケ
コ	こ	こ	コ	こ	コ	こ	コ
ク	く	く	ク	く	ク	く	ク
カ	か	か	カ	か	カ	か	カ
キ	き	き	キ	き	キ	き	キ
ク	く	く	ク	く	ク	く	ク
ケ	け	け	ケ	け	ケ	け	ケ
コ	こ	こ	コ	こ	コ	こ	コ
ク	く	く	ク	く	ク	く	ク
カ	か	か	カ	か	カ	か	カ
キ	き	き	キ	き	キ	き	キ
ク	く	く	ク	く	ク	く	ク
ケ	け	け	ケ	け	ケ	け	ケ
コ	こ	こ	コ	こ	コ	こ	コ
ク	く	く	ク	く	ク	く	ク
カ	か	か	カ	か	カ	か	カ
キ	き	き	キ	き	キ	き	キ
ク	く	く	ク	く	ク	く	ク
ケ	け	け	ケ	け	ケ	け	ケ
コ	こ	こ	コ	こ	コ	こ	コ
ク	く	く	ク	く	ク	く	ク
カ	か	か	カ	か	カ	か	カ
キ	き	き	キ	き	キ	き	キ
ク	く	く	ク	く	ク	く	ク
ケ	け	け	ケ	け	ケ	け	ケ
コ	こ	こ	コ	こ	コ	こ	コ
ク	く	く	ク	く	ク	く	ク
カ	か	か	カ	か	カ	か	カ
キ	き	き	キ	き	キ	き	キ
ク	く	く	ク	く	ク	く	ク
ケ	け	け	ケ	け	ケ	け	ケ
コ	こ	こ	コ	こ	コ	こ	コ
ク	く	く	ク	く	ク	く	ク
カ	か	か	カ	か	カ	か	カ
キ	き	き	キ	き	キ	き	キ
ク	く	く	ク	く	ク	く	ク
ケ	け	け	ケ	け	ケ	け	ケ
コ	こ	こ	コ	こ	コ	こ	コ
ク	く	く	ク	く	ク	く	ク
カ	か	か	カ	か	カ	か	カ
キ	き	き	キ	き	キ	き	キ
ク	く	く	ク	く	ク	く	ク
ケ	け	け	ケ	け	ケ	け	ケ
コ	こ	こ	コ	こ	コ	こ	コ
ク	く	く	ク	く	ク	く	ク
カ	か	か	カ	か	カ	か	カ
キ	き	き	キ	き	キ	き	キ
ク	く	く					

分野	出版年月	書名	著者	出版者	出版地	字体数
【歴史】	M. 24. 11	『有馬温泉誌』	田中芳男 (編)	田中芳男	東京	61
【伝記】	M. 26. 06	『安土公』	川崎三郎	川崎三郎	東京	53
	M. 26. 07	『カーライル』	平田久	民友社	東京	49
【経済】	M. 31. 09	『塩政論』	井上甚太郎	井上甚太郎	東京	48
【自然科学】	M. 33. 08	『天気予報論』	中川源三郎	裳華書房	東京	49
【医学】	M. 33. 03	『医事断片』	田中祐吉	半田屋医籍	東京	49
【文学】	M. 24. 03	『女煙草』	佃与次郎 (速記)	中礼堂	東京	58
	M. 24. 04	『目撃』	半井桃水	今古堂	東京	60
	M. 24. 11	『有馬温泉誌』	田中芳男 (編)	田中芳男	東京	61
	M. 24. 12	『落葉』	藤蔭隠士	金港堂	大阪	52
	M. 25. 05	『返り咲』	遊波散人	鍾美堂	大阪	62
	M. 25. 03	『烈真具』	赤司繁太郎	一二三館	東京	56
	M. 25. 03	『女非人綴錦』	八文字屋自笑・八文字屋其美	礮川出版社	東京	68
	M. 25. 10	『鞆』	浦の舍みるめ	大和瀬千秋	西蒲村 (静岡)	78
	M. 26. 03	『綴錦』	鐘美樵夫 (編)	礮川出版	東京	51
	M. 26. 04	『仇しの夢』	著楽道人	中村鍾美堂	大阪	55
	M. 26. 11	『海お化け』	安富衆輔	庚寅新誌社	東京	51
	M. 27. 04	『宇都宮騷動記』	長谷川文太郎 (編)	長谷川文太郎	東京	71
	M. 27. 05	『盲詩人』	別天樓主人	政教社	東京	52
	M. 27. 07	『生不動の源治』	今昔亭桃太郎 (講演)	同盟出版館	大阪	49
	M. 28. 02	『優等生』	谷口流鶯	求光閣	東京	58
	M. 28. 05	『穢梅』	半井桃水	蕉志堂	東京	52
	M. 28. 11	『仇討奥平源八郎』	伊豆の屋主人	愛知堂	東京	59
	M. 28. 12	『さ、舟』	幸田露伴	青木嵩山堂	東京	49
	M. 29. 02	『復讐裏見双』	探菊散人	弘文館	東京	53
	M. 29. 06	『命不知』	江見水蔭	駸々堂	東京	54
	M. 29. 08	『女曾我』	器園主人	由盛園	東京	56
	M. 30. 03	『天草騷動』	転々堂生雲 (速記)	朗月堂	東京	59
	M. 30. 06	『仇討かゝ見山』	今村次郎 (速記)	三輪逸次郎	東京	54
	M. 30. 07	『天下豪傑後藤又兵衛』	広雄次郎 (速記)	上田屋	東京	53
	M. 30. 08	『伊達評定』	速記社々員 (速記)	大川錠吉	東京	57
	M. 30. 10	『死次第権三郎』	石原明倫 (速記)	鮮泉堂	東京	51
	M. 31. 06	『いへ物語』	饗庭堂村	春陽堂	東京	49
	M. 31. 09	『南京松』	柳煙漁史	金根堂	東京	54
	M. 31. 10	『染摺血桜お花』	金井金山	有喜世館	東京	51
	M. 32. 02	『落葉物語』	飯田永夫 (校註)	上原書店	東京	49
	M. 32. 06	『明治小説集』	隅谷巳三郎 (編)	開拓社	東京	49
	M. 32. 09	『廻国雜記』	大月隆	文学同志会	東京	50
	M. 32. 10	『王冠』	長田秋濤	春陽堂	東京	48
	M. 32. 12	『日本仇討全集』	柴田南玉 (自口自記)	国華堂	東京	53
	M. 33. 01	『明石志賀之助』	加藤蚯蚓	日吉堂	東京	54
	M. 33. 09	『赤蜻蛉』	村上浪六	青木嵩山堂	東京	51
【翻訳文学】	M. 24. 02	『心の楽』	加藤幹雄 (訳)	イーグル書房	東京	73
	M. 25. 06	『人さまざま』	自笑居士 (重訳)	精完堂	東京	56
	M. 27. 05	『ありふれ物語』	大島正健 (訳)	警醒社	東京	50
	M. 27. 12	『いわび歌』	若松腹子 (訳)	警醒社書店	東京	48
	M. 28. 11	『海賊船』	若松安次郎 (訳)	中村鍾美堂	大阪	72
	M. 29. 05	『西洋仙郷奇談』	井上寛一 (訳述)	東陽堂	東京	58
	M. 29. 11	『片恋』	二葉亭四迷 (訳)	春陽堂	東京	49
	M. 31. 06	『ユーゴー小品』	森田思軒 (訳)	民友社	東京	48
	M. 33. 12	『決志少年』	桜井鶴村 (訳述)	文武堂	東京	48

【表27】 平均使用字体数の推移 (時期別・資料の種類別)

出版年	1-6	7-11	12-16	17-23	24-33
整版	89.6	81.7	78.7		
活版	87.6	68.6	68.5	62.9	53.1
草双紙	66.7	70.9	67	62.3	

【表28】 標準偏差の推移 (時期別・資料の種類別)

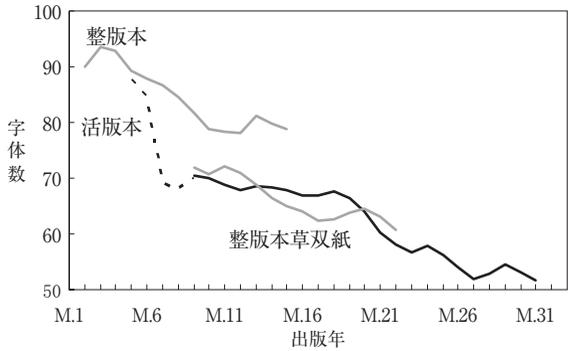
出版年	1-6	7-11	12-16	17-23	24-33
整版	16.9	11.7	9.2		
活版	16.9	12.5	7.6	8.6	7.1
草双紙	4.0	6.1	6.9	5.1	

間とともに、資料における字体数のばらつきが減っていくことが確認された。各時期の平均値を【表27】に、標準偏差を【表28】にまとめた。各年の前後三年の平均値を図4にまとめた(資料が少ないために、活版本は七年までを点線にした)。

使用字体の収斂傾向は確認できたが、この傾向に何が関与したのか、ということについては、本稿で扱った資料だけでは確かで

はない。文学作品においては、ジャンルとの関連や、文語体・言文一致体など文体との関連は認められず、文学史または文体史とは直接的な関係がないと考えられる。著者個人における字体の使用方の変化、あるいは筆者、出版者、または活版所の交替等、本稿では様々な筆者や出版者による資料を扱ったが、同じ筆者

図4 前後三年間の平均字体数



や出版者による資料を重点的に扱って、字体の使用傾向との関係を確かめるのは今後の課題である。

注

- (1) 浜田啓介 (一九七九)「板行の仮名字体——その収斂的傾向について——」『国語学』一一八輯 (『近世文学・伝達と様式に関する私見』(二〇一〇 京都大学学術出版会) に再収)
- (2) 三好行雄 (一九七七)「『文献学の恐ろしさに無知な蛮勇』について」『文学』四五巻二号
- (3) 本稿では、音節を片仮名表記にしてかき括弧 ( ) に入れ、字体または個別の字形を平仮名表記にして山型括弧 ( ) に入れた。
- (4) 注1と同論文による。

(5) 例えば内田明は新旧の活字の混植について述べている。「築地体後期五号活字の出現時期と初期「アンチック」活字について」『活字印刷の文化史』(二〇〇九 勉誠出版) を参照。

(6) 府川充男 (二〇〇五)『聚珍録』第三篇 假名(三省堂)

(7) 石川巖『明治初期戯作年表』(一九二七 従吾所好社)

(8) 佐々木享 (一九九七)『明治の草双紙——京阪活版小説を中心に——』『近世文学』六六号

(9) 東京金玉出版社などの出版者によって清朝体活字を用いた資料もあったが、それぞれ明朝体活字と清朝体活字における使用傾向の違いに関する調査は今後の課題とする。

(10) 資料の一部に使われている振り仮名を調査したが、活版本では早い時期から字体数が少なく、そもそも振り仮名活字の字体数が少なかった可能性が高いと考えられる。整版本の振り仮名字体も一部調査したが、その傾向を把握するためには江戸時代以前の資料と合わせて見る必要があるため、本稿では取り上げなかった。

(11) 「標準偏差」は、データのばらつきを示す数値である。個々のデータ数値を  $x$ 、字体数の平均値 (以降「平均字体数」と呼ぶ) を  $\bar{x}$ 、データの個数を  $n$  とすれば、次のように計算する。

$$\sqrt{\frac{\sum_{i=1}^n (x_i - \bar{x})^2}{n-1}}$$

(12) (10) は明治四年刊『法普戦争誌略』においては正しく「に」として使われているが、同じ四年刊『芋仏交兵記』では、「つ」として使われている。何回も使われているため、不注意による一回的な間違いではないと考えられる。

(13) 十三年三月刊の『浮世の迷惑』においては、文章全体にわたって (と) (本来「せ」) の活字が「を」の仮名として数回使われている。(タニエル・こばやしベクター/神戸大学大学院生)